

大学受験指導とコミュニケーション能力向上は両立できる

安木 真一

1 はじめに

文部科学省から高等学校の新指導要領案が発表された。目標には「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」とあり、また実施科目も、コミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ等であり、コミュニケーションという言葉はますますこれからの英語教育のキーワードになるであろう。

コミュニケーションという語を『明鏡国語辞典』（大修館書店）で引いてみると、「ことば・文字・身振りなどによって、意志・感情・思考・情報などを伝授・交換すること」とある。また *Oxford Dictionary of English* (OUP) では「the imparting or exchanging of information by speaking, writing or, using some other medium」とある。どうやらコミュニケーションあるいは communication とは誰かと誰かの間で、情報などの伝授、交換があることようだ。英語教育の目標がコミュニケーション能力つまり情報の伝授・交換する能力を育成することであるなら、この能力を育成することは、いわゆる大学入試に対応するものになるのであろうか。

2 アンケートの結果から

ここで安木(2008)にて提示したアンケートの結果について紹介する。各都道府県で実施された、悉皆研修や、研究会の際に、大学入試対策とコミュニケーション能力育成の両立に関してアンケートを実施した。所属は公立中学英語教員51名(14.7%)、私立中学英語教員6名(1.7%)、公立高校英語教員225名(64.8%)、私立高校英語教員15名(4.3%)、高専・短大・大学英語教員16名(4.6%)、その他34

名(9.8%)の計347名であった。いくつかある質問項目の中でここでは「英語のコミュニケーション能力を育成する力と、大学入試に対応する力は両立できるか否かとそれを選んだ理由」についてのみ考察する。

コミュニケーション能力育成と大学入試に対応する力は、70%の教師がそう思う、または、どちらかと言えばそう思うと答えており、あまりそう思わないまたはそう思わないと答えている者は30%であった。これは高校教師に関しても、それぞれ73%、27%ではほぼ同じ結果が出ている。ここでは両者は両立できるとした意見を3つに分類し、代表的意見を紹介するとともに筆者の意見を加えたい。

受験指導とコミュニケーション能力向上のための指導は両立できると選択した回答を分類すると**発想、指導技術、教材**の3つに分類できた。

まず発想については2つに分類できた。一つは実は両者には違いはないのではないかというものである。「」はアンケートのコメントであり、→は筆者のコメントである。()内は回答者のアンケート実施時の所属である。

①発想

両者は同じものである。

「コミュニケーションのための英語と入試英語とをいちいち英語の種類分けをしない。英語は英語ではないか?」(私立高校)

「コミュニケーション能力を相手の意図を正しく理解し、自分の意図を発信するとすれば、長文読解やライティングはまさにその活動になると考えます。また文法も大切な知識であるため、入試が独立しているとは思いません。Speaking能力を高めるのは大学に入ってから学習で対応できると思います。」(公立高校)

「コミュニケーションとは狭義のオーラル系ではなく、論理を理解し、話の展開を理解することだと

思うので、十分対応すると思います。但し中にはあまり意味があるとは思えない出題をする大学もありますが、そういうところは激減していると思っています。」(公立高校)

→コミュニケーションの定義に関しては相違はあるが、相手の意図を理解するという一点では共通点が見られる。普段の高校の授業で行っているものの中にコミュニケーション活動があると考えており、それは必ずしもオーラル的な活動に限定していない。

入試についての発想

「大学入試も変化しています。よく調べて下さい。また冠(名称：筆者注)がどのようにについても英語であることには間違いはありません。要は教える側の力・見識・方法・経験等により、どうにでも解釈できると思います。むしろ教える側の意識に鍵があるのではないのでしょうか。」(大学)

「大学入試の形態も、入試そのものも変わりつつある。」(公立・SELHi 高校)

「とにかくある程度の単語数・文法はむりからにでも習得させる必要がある。大学入試は最大の英語学習の動機となっている。大学入試のために培った英語力をコミュニケーションに生かせばよい。」(公立高校)

→入試は変化しておりコミュニケーション能力を測定するものになっているという意見である。また入試を動機づけのために利用することも示唆している。

②指導技術

音読

「大学入試で使われる長文や会話文も年々実用的になってきています。入試問題を Reading だけでなく、音読を反復練習することでハイレベルな実用英語をとりあえず知識として習得できます。アウトプットはその状況になったときに自分で試行錯誤して使いこなす努力をすればいいと思います。」(塾)

「音読練習や多読を継続することで語彙力や構文力等を養い英語の思考回路をつくる。」(公立高校)

「第二言語習得理論で語られる『気づき→理解→Intake→自動化』において音読指導を中心としたよい Intake の活動は、コミュニケーション能力と大学入試に対応する力の両方を育成できると考えます。しかし自動化に必要なアウトプット活動においては私自身、効果的な方法を見つけていないのが

現状です。」(公立高校)

→音読が両者の両立の鍵であるという意見は多く見られた。これは英語教師の多くが長期の留学経験なしで英語を身につけており、音読を何度もして身につけた経験に由来していると思像できる。

技能統合

「長文問題を扱った後に、passage の content について自分の考えなどをライティングさせてできればスピーチさせるなどが考えられます。」(公立高校)

→一つの技能を単独で教えるのではなく、いくつかの技能を組み合わせながら、アウトプット活動を実施するというものである。筆者は技能統合の順番は最初にリスニングを行い次にリーディング、ライティングと続き、最後にスピーキングであると考えている。

③教材

Authentic

「コミュニケーション能力が必要な情報を受信し、まとめ、自分の言葉で英語を使って発信するものであるならば、その課程でさらされる、英語の考え、発想、見方等が育成されると思う。英語の長文スタイルや形式が身についたり、国語力、考える力も同時に育成されると思う。質の高い英文、知的好奇心をくすぐる英文に多くふれ、慣れ親しむべきだと思う。」(公立 SELHi 高)

→アウトプットの前に入試の英文を含む生徒の知的好奇心をくすぐる英文を用いることが重要である。これには2つの示唆がある。一つは教材を精選すべきであるということ、もう一つは情報を受信すること、つまりリーディング活動自体もコミュニケーション活動であるということである。

入試問題の利用

「入試問題を取り扱う中で、リスニングとスピーキングを入れることによって、いわゆる入試英語の中には、英語でコミュニケーションをとるときに必要な、文法や語彙、用語が十分に含まれているので、例えば受験用の文法の学習の際にそれを用いたスピーキングやリスニングの練習ができるのではないのでしょうか。」(公立高校)

→内容ばかりでなく、入試問題で使用される表現や文法事項を使って練習することによって身につけるといふ発想である。

④名人の先生の考え

ここで、先進的な実践をしておられる著名な先生2名のアンケートから紹介したい。著名な先生の考えは上記の①、②、③、特に②、③と一致しているのだろうか。仮にA先生、B先生とする。まず、A先生は先生の居住される地域のみならず全国でも著名な先生であり、セルハイ(すでに終了)でも高い評価を得られた先生である。先生の勤務校は進路実績でも着実に成果が上がっている。先生は箇条書きで両者の両立のために以下の4点を挙げておられる。

- 1 authenticな教材を与える
- 2 多読によりWPMを上げる
- 3 4技能統合型により、input-intakeが深まる
- 4 一部の入試問題を除き、読解の中で文法項目は指導できると考える

→この4点は上記の指導技術並びに教材で述べられている項目と一致している。名人の先生はどうか。やら生徒の知的好奇心を刺激するauthenticな教材を使用し、4技能の統合をはかり、入試問題の題材の中でも文法の指導をしておられるようだ。

もう1名、有名大学に多数の合格者を出す、国立の中高一貫校教員である、著名なB先生の考えを紹介する。

「多読、多書、技能融合型の練習活動、教材の内容に自己介入できるような指導。」

→ここでも3つの観点のうち、指導技術については技能統合、また、教材については、内容について自己介入できることを述べておられる。技能を統合し、生徒にとってよい教材を選択することが大切であるということであり、A先生の考え方と類似している。また、多読についても言及しておられ、量を与えることも大切な要因であることを示唆しておられる。

3 まとめ

受験指導はコミュニケーション能力の養成と両立できるかというのが本稿のテーマである。私は、「受験指導とコミュニケーション能力の向上の両立は可能である」とここで結論づけたい。

そのための鍵になるのは、まず発想である。そもそも受験用の英語とコミュニケーションの英語との間に差異はあるのだろうか。最もコミュニケーションとは関係がなさそうなリーディングでさえ、自分

の内面の中で著者と対話している、Intrapersonal Communicationだと考えることはできないだろうか。コミュニケーションには大きく分けて人と人との間で行われるInterpersonal Communicationと、自分の内面な中で行われるIntrapersonal Communicationがある。前者ばかりでなく後者も実はコミュニケーションであると考えられている。リスニングやリーディングのようなインプット活動も聞き手や読み手が、話し手や著者との対話をしながら、情報を求めているという点ではコミュニケーションであると定義することもできる。そうなると入試問題の読解活動の中にも、情報を求めながら読解するという点を重点にした指導を実施すれば、立派なコミュニケーション活動であると定義づけられる。確かに前後の文脈も関係なしに、構文の力をみて和訳させるような入試問題も依然として出題されているが、多くの先生方が指摘しておられるとおり、改善がみられている。また、仮によくない問題が出題されていても、長文を使ってまず著者の意図をとらえるようなタスクを与えた後で、問題に取り組むことで立派なコミュニケーション活動になるのではなかろうか。

次に考えられるのは、指導技術の確立である。この鍵は音読と4技能統合にある。多くの心理言語学の先行研究で明らかになっているように、ポーズが一つの鍵である。人間はポーズによって区切られたチャンクの意味を認識し、チャンクとチャンクの相互の関係を理解しながら文の意味を理解し産出しているという「ことばの知覚・認識・生成のメカニズム」は、多くの先生方が考えている。音読や4技能統合の方向と一致している(注1)。チャンクを意識したリスニングから入り、チャンクを意識した情報を求めるリーディング、チャンクを意識した多様な音読活動、そしてライティング、スピーキング等の発展的な活動へとつなげていくことで技能を統合しながらそれぞれの技能を統合できる(注2)。

最後に教材である。入試問題の長文の中にも生徒の知的好奇心を刺激したり、あるいは感動を与えるものも少なくない。そのような教材を発掘し、授業の中で用いることができる。それをどう調理するかが、教師の腕の見せ所である。よい教材を通して何を教えるか、人間教育としての英語教育という側面も大切である。

受験指導そのものの中でコミュニケーション能力を育成することは可能であり、高校の英語教育で育成された力は、将来の更にインターアクションが必要な場面の土台となる。今後も研究を深め、この問題について提言していく予定である。

注1 ポーズについては河野(2001)、鈴木(1998)に、ことばのメカニズムについては門田・野呂(2001)に詳しい。

注2 安木(2001)に具体的指導法が述べられている。
<http://www.eiken.or.jp/teacher/research/pdf/study13.pdf>にて閲覧可能である。

主要参考文献

- 河野守夫(2001)『音声言語の認識と生成のメカニズム：ことばの時間制御機構とその役割』金星堂
- 門田修平、野呂忠司(編)(2001)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 鈴木寿一(1998)「音声材料中のポーズがリーディングスピードに及ぼす影響に関する実証的研究」ことばの科学研究会(編)『ことばの心理と学習』金星堂
- 安木真一(2001)「フレーズ音読を中心にした授業の効果と問題点」STEP BULLETIN VOL13. 日本英語検定協会
- 安木真一(2007)「コミュニケーション能力育成と受験対応を両立している名人教師から学ぼう！」STEP 英語情報 日本英語検定協会
- 安木真一(2008)「大学入試対策とコミュニケーション能力の育成は両立可能か？—アンケートから考える」第34回全国英語教育学会東京大会発表要項

(鳥取県立鳥取西高等学校教諭)